

# 千秋公園時鐘の復活

時鐘は寛永16年（1639）、秋田藩2代藩主佐竹義隆のときに設置されましたが、戦争の激化により軍事資材として供出され失われてしまいました。そして、戦後間もない昭和23年に、林金属工作所所長の林金太郎氏、工場長の林次郎氏らが新たに「平和の鐘」を鑄造し、秋田市に寄附しました。

その後、昭和48年に公募で決まった「千秋の鐘」の愛称で現在も親しまれています。



左の文書は、昭和17年12月8日に秋田県内政部長から秋田市に対して出された「時鐘保存申請ニ関スル件」です。

戦時下の昭和17年12月4日に秋田市は時鐘を保存するため県に申請をしました。しかし、このとき民間の各寺院の梵鐘は供出されることが決まっており、官庁や公共団体は率先すべきとの理由によりこの申請は県から差戻しとなっています。

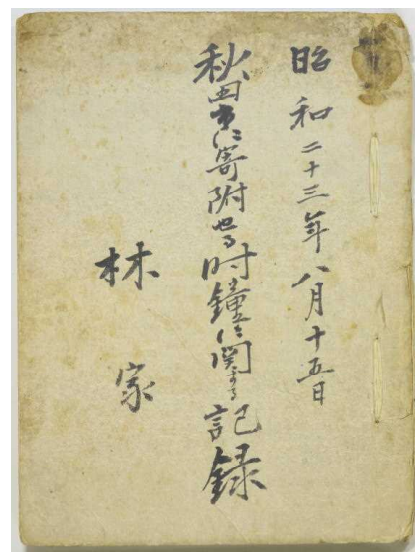
これによって、秋田市は昭和18年3月8日に時鐘を供出しています。

「昭和17~23年 時鐘関係書類」より

右の資料は、「平和の鐘」を鑄造した林金太郎氏が残した記録です。

時鐘復活のための調査・研究や秩父宮・同妃殿下から一輪立と盾を賜り材料としたこと、鑄造の工程、寄附の際にお披露目のパレードが行われたことなどが書かれています。

パレードは、工場があった川尻町から大町、檜山、川反など市内各地を巡り千秋公園まで7時間もかけて行われたそうです。



「秋田市に寄附せる時鐘に関する記録」